

2018/01/07

## 「5つの基本」

2018年が始まりました。新年最初の礼拝は、クリスチャン生活の基本を確認して、スタートしましょう。

### 1. 何があってもさばかない

「さばいてはいけません。さばかれたいからです。あなたがたがさばくとおりに、あなたがたもさばかれ、あなたがたが量るとおりに、あなたがたも量られるからです。」(マタイ 7:1-2)

さばくことは、自分を追いつめる、非常に危険な行為です。

私達が人をさばく理由は、自分自身を受け入れることができないためです。すべての人は、自分が不完全であることが受け入れられないため、その不安を取り除こうとして、完全になることを目指して生きているのですが、どうやっても人は完全にはなり得ません。そこで、他者を否定することによって、自分を肯定しようとする心理が働きます。それが、さばくということです。

心理学の一理論である交流分析では、自分を受け入れることを、「I am OK.」という言い方をします。そして、自分がOKであることを確認する一番簡単な方法が、人をさばくことです。さばくことによって、相手の上に立った気になり、一時的に「I am OK.」を入手することができます。しかし、一時的な「I am OK.」を保つためには、さばき続けなければならず、やがてその効果も完全に薄れ、さばくことでは自分を受け入れることができなくなり、かえって絶望を感じるようになります。

人間は必ず死を迎える存在であり、人と比較すると必ず劣っている部分が見つかります。人間はどこまでいっても不完全な存在なのです。ですから、自分ひとりではどうしても自分を受け入れることができません。私達が、自分を受け入れることができる唯一の道は、第三者に受け入れてもらうことです。ところが、これにも限界があります。相手を100%受け入れることができる人などいないからです。ありのままの私達を100%受け入れてくれる方は、イエス・キリストだけです。結局、キリストに愛されている自分を受け取ることでしか、自分を受け入れる道はないのです。

自分の力で「I am OK.」を手に入れるために、私達は人をさばきます。しかし、それは、絶望にしかつながらないし、周りの人にも被害を与えます。さばくとは、怒るということです。ですから、クリスチャン生活の基本の第一は、さばかないこと、怒らないことです。自分自身もほかの人も、神が受け入れると言う者を、あなたが拒否してはなりません。

聖書が「さばいてはならない」と言っているのは、人に対してだけではなく、自分に対しても同じです。イエス・キリストを裏切ったユダは、自分をさばいた結果、絶望に追い込まれ、自殺しました。さばくことがどれほど危険な行為か、なぜ他者をさばかずにはいられない

いのか、イエス様はよくご存知ですから、私達には裁く権利がないこと、自分の借金が赦された者は人の借金も赦しなさい等、様々な表現で、さばいてはならないことを教えています。

私達は、自分の存在理由を見出したいがために、自分を高くしようとしているのですが、さばけばさばくほど、自分を追い込んでしまいます。イエス様が、不完全なあなたをOKだと言って受け入れておられることを認め、イエスに愛されている自分を受け入れることしか、自分を受け入れる道はないのです。

## 2. 何があってもつぶやかない

「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです。すべてのことを、つぶやかず、疑わずに行ないなさい。」(ピリピ 2:13-14)

なぜつぶやいてはいけないのか、それは、神があなたに働きかけ、導いておられるからです。私達は自分の中に自由な意志があると思っています。しかし、神様は、一人一人に対して計画があり、常に働きかけて導いておられるのです。それは、神が私達を背負っておられるとも表現されています。

このことを教えた有名な出来事があります。それは、旧約時代、モーセがエジプトからイスラエルの民を連れ出すという大事業です。エジプトで苦役を強いられていたイスラエル人達は、神に導かれたモーセに率いられて紅海を渡り、砂漠を渡り、カナンに向かいました。しかし、イスラエル人達は、旅がつらくなると初めの感謝を忘れ、なぜ道に迷うのか、同じ食事には飽きた、なぜこんな苦勞をしなければならないのか、エジプトにいたほうがましだなどと、つぶやき続けました。その結果、旅はひどく遠回りをする事となり、エジプトを脱出したイスラエル人は、ヨシュアとカレブを除いてカナンの地に着くことができませんでした。なんというもったいないことをしたのでしょうか。

私達は、同じ過ちを繰り返すことなく、神様が私達に働きかけ、導いていることを忘れてはなりません。あなたが教会に来たのも、救われたのも、すべて神様の働きかけと導きがあったからこそその結果です。そして、今神様は私達を訓練しておられるのです。ですから、つぶやかずに、神様を信頼し、感謝して生きましょう。

## 3. 何があっても背伸びをしない

「私は、自分に与えられた恵みによって、あなたがたひとりひとりに言います。だれでも、思うべき限度を越えて思い上がってははいけません。いや、むしろ、神がおのおのに分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深い考え方をしなさい。一つのからだには多くの器官があって、すべての器官が同じ働きはしないのと同じように、大ぜいいる私達も、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。」(ローマ 12:3-5)

聖書は、それぞれに働きがあって、それぞれが重要だと教えています。しかし、私達は、自分にはないものにあこがれを抱き、「～のようになれば、どれほど幸せだろう」などと考えたり、自分と比較して、「自分はなんと不幸なのだろう」と思ったりしてしまうものです。私達は、とにかく他人の生活が素晴らしく見えるものなのです。

このように、自分の思うべき限度を超えてしまうと、それぞれの役割や賜物に気づくことができません。聖書は、一人一人が違うのは、それぞれがキリストのからだをつかさどる器官であって、神さまによって素晴らしいものであると教え、とにかく与えられている環境を感謝しなさいと教えています。このことを受け入れて生きていくなれば、イエス様がおられるから幸せだということに気づくでしょう。神様は、それぞれに役割や歩むべき道を用意しておられます。

#### 4. 何があっても神の霊による

「すると彼は、私に答えてこう言った。「これは、ゼルバベルへの主のことばだ。『権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって』と万軍の主は仰せられる。」(ゼカリヤ 4:6)

私達は、権力や能力によって生きているのではなく、神の霊によって生きているということをおぼえてはなりません。

かつて、宮前チャペル献堂の時に、私は、この御言葉を教えられました。当時、信徒はほとんどが学生で、お金もなく、土地もなく、教会堂が欲しいという願いは、ただ神様に頼るしかありませんでした。そうして、神様の力によって教会堂は完成し、その後、掛川チャペル、青葉チャペルが献堂されました。その中で、一つとして権力や能力によって建ったものはありません。

人は、権力や能力があればうまくいくと思いがちです。また、問題が起こると、すぐ権力や能力に頼って解決しようとしてしまうものです。しかし、そうではありません。クリスチャンにとって大切なことは、すべて神の霊によってなされるのだということです。

#### 5. 何があっても感謝する

「あなたがたのすることは、ことばによると行ないによるとを問わず、すべて主イエスの名によってなし、主によって父なる神に感謝しなさい。」(コロサイ 3:17)

多くの方は、神様との関わり方について、自分の外側におられる神様と交わるイメージを持っているものです。しかし、聖書は、神様は、私達の中におられると教えています。なぜなら、神様は、人を造る際、ご自分のいのちを吹き込むことによって人間のいのちを造られました。ですから、私達のいのちの土台は神ご自身であり、それぞれが神のいのちを持っているのです。これが、神様が私達の中に住んでおられるということです。ですから、人に対してすることは、神様に対してすることと同じであり、すべてのことを主に対してするよう

に感謝しなさいと、聖書は教えているのです。

なぜ主に対してすることは、感謝できるのか、それは、神様がすべてのことを益と変えてくださるからです。私達の土台である神様は、ご自身の上に乗っているものが壊れないように支えてくださる方です。私達は、失敗し、過ちを犯しますが、それを益と変えてくださるのです。

創世記に登場するヤコブは、親をだまして長子の権利を奪い取り、兄から憎まれて故郷を追われ、美しい女性に執着して結婚を果たし、頭を使っておじの財産を手に入れることに成功します。一見すると、彼は欲望のままに生きているかのようです。しかし、主はこれらのことをすべて益と変えたのです。

ヤコブは、いろいろなものを手に入れれば入れるほど、不安と苦しみを背負いました。叔父の怒りを買って、故郷には自分を殺そうとする兄がおり、自分の力ではどうすることもできなくなったヤコブが、最終的に神様に助けを求めことによって、イスラエルという名に変えられ、イスラエルという国家が始まるのです。ヤコブの人生を見る時、本当に主はすべてを益と変える方だということがわかります。

私達はそれぞれ、いろいろな人生を生き、様々な過ちや失敗を犯す者ですが、主はそれらすべてを益としてくださるのです。このことを知るなら、何があっても感謝することができます。この姿勢を忘れることなく生きていくことができれば幸いです。